

昭和五十五年

日本思想史関係研究文献要目

凡 例

一、本要目には、昭和五十五年発行乃至発表された日本思想史関係の単行本並びに雑誌・紀要論文を収録した。
一、本要目には、日本思想史関係の学術的な研究を選択収録することを原則としたが、一般読者向けのものも適宜収めた。

一、右のように選択した文献を、Ⅰ単行本目録 Ⅱ雑誌・紀要論文目録の二部に分け、次のように配列した。
ⅠⅡ部とも、文献をその内容によって、総雑・古代・中世・近世・近代に分け、さらにそれぞれに属する思想史関係研究文献を、一般・学問道德教育方面・宗教方面・文芸美術芸能方面・政治社会経済方面・その他の項目順に分類配列した。

単行本は、書名・著書名・発行所名の順、論文は、題名・執筆者名・掲載雑誌紀要巻号数の順に記載した。

一、本要目の作成には、東北大学文学部日本思想史学研究室所属の助手・大学院学生があたった。

一、日本思想史という学問の性格上から、研究文献の選択に迷うことが多く、短時日の間に作成したためもあって、文献の選択や配列に不備な点があるものと考えられる。大方の御教示をお願いする。

I 単行本目録

総 雑

日本における倫理と宗教	下出積 与編	吉川弘文館
日本文化史研究	芳賀幸四郎先生 古稀記念論文集 編集委員会編	笠間書院
日本の思想 上	南波 浩二編 永原慶二編	新日本出版社
〃 下	荒木 繁一編 島松栄一編	〃
日本経済思想史論集	杉原四郎	未来社
日本的宗教心の展開	宗教思想研究会編	大明堂
国家と仏教 近世・近代編 (日本仏教史研究2)	二葉憲香編	永田文昌堂
太子信仰の研究	林 幹弥	吉川弘文館
庚申信仰の研究	窪 徳忠	原書房
民衆文化の源流	色川大吉編	平凡社教育産業 センター
東国の古代から近代へ		
日本古代中世の思想と文化	渡部正一	大明堂
神道信仰と民衆・天皇制	藤谷俊雄	法律文化社

古 代

日本古代の国家と宗教 上・下	井上薫教授退官 記念会編	吉川弘文館
講座 日本の古代信仰		学 生 社
1 神々の思想	上田正昭編	
2 呪ないと祭り	伊藤幹治編	
4 呪禱と文学	土橋 寛編	
5 呪禱と芸能	山上伊豆母編	
日本古代王朝の思想と文化	川副武嵐	吉川弘文館
古代朝鮮仏教と日本仏教	田村円澄	吉川弘文館
伝教大師研究 別巻	天台学会編	早大出版部
空海の軌跡	佐和隆研	法蔵館
空海密教への道	中島尚之	三一書房
慈覚大師研究	福井康順編	早大出版部
鎌倉仏教	田中久夫	教 育 社
猿楽能の思想史的考察	家永三郎	法政大学出版局
西行(人物叢書)	目崎徳衛	吉川弘文館
慈円の研究	多賀宗隼	吉川弘文館
講座道元 2 道元禅の歴史	鏡島元隆編	春秋社
一遍と時宗	浅山円祥	一遍会(愛媛県)

近世

日本近世思想史研究	前田 一良	文一総合出版
近世革新思想の系譜	市井 三郎	日本放送出版協会
近世念仏集團の行動と思想 浄土宗の場合(日本人の行動と思想)	長谷川 匡俊	評論社
本居宣長(人物叢書)	城 福 勇	吉川弘文館
幕末国学の研究	芳 賀 登	教育出版センター
近世沖繩の社会と宗教	島 尻 勝太郎	三一書房
近世初期実学思想の研究	源 了 圓	創文社
山鹿素行兵学の史的研究	石 岡 久 夫	玉川大学出版部
叢書 日本の思想家 ²⁴ 中井竹山・中井履軒	加 地 伸 行 他	明德出版社
洋学史の研究	佐 藤 昌 介	中央公論社
高松凌雲と適塾	伴 忠 康	春秋社
医の時代 高松凌雲の生涯	木 本 至	社会評論社
大分キリシタン類族帳の研究 (キリシタン類族帳研究叢書)	矢 島 浩	むさしの書房
秋田切支丹研究 サンタクルス	武 藤 鉄 城	翠楊社

近代

近代日本の宗教	村上 重良	講談社
---------	-------	-----

日本マルクス主義の歴史と反省

日本近代国家と民衆運動	岩井忠熊 他編	有斐閣
近代日本の宗教思想運動	脇本平也	脇本平也私家版
近代日本経済思想史研究	塚谷晃弘	雄山閣出版
文明開化と民衆意識	ひろた まさき	青木書店
流転の民権家 村野常右衛門伝	色川大吉	大和書房
越前自由民権運動の研究	大槻 弘	法律文化社
大隈重信 その生涯と人間像	正田健一郎 訳	早大出版部
日本プロテスタント・キリスト教史	土肥 昭夫	新教出版社
天皇機関説の周辺 三つの天皇機関説と昭和史の証言	宮本 盛太郎	有斐閣
南方熊楠 人と学問	笠井 清	吉川弘文館
戦前日本の思想統制	R・H・ミッチェル 奥平康弘 他訳	日本評論社
日本社会主義運動思想史Ⅱ ある離脱	絲屋 寿雄	法政大学出版局
明治社会主義者西川光二郎	田中英夫	風媒社(愛知県)
幸徳秋水 日本の急進主義者の肖像	F・ノートヘル フアイ 竹山護 夫訳	福村出版
求道の人・河上肇	住谷 一彦	新評社

山辺健太郎 回想と遺文

△近代の超克▽論
昭和思想史への一断想

覚めよ女たち
赤瀬会の人びと

伝統的右翼
内田良平の研究

転向論序説

地方産業の思想と運動

大正期の権力と民衆

天皇制形成期の民衆闘争

ファシズム期の国家と社会
8運動と抵抗 下

遠山茂樹 他編
犬丸義一

広松 涉

江刺 昭子

初瀬 龍平

中島 誠

祖田 修

小山仁 志編

後藤 靖編

東大社会科学研
究所編

みすず書房

朝日新聞社

大月書店

九大出版会

ミネルヴァ書房

ミネルヴァ書房

法律文化社

青木書店

東大出版会

「大王」から「天皇」へ
—古代君主号の成立をめ
ぐって—

記紀・律令における「帰化」
「外蕃」の概念とその用例
—古代日本の国際関係を
めぐって—

クマソの実態とクマソ観念
の成立について

古代民衆教育をめぐる若干
の問題

古事記と神祇革命

古事記神話における天神の
位置

古事記の神々—大年神の系
譜を中心として—

古代王権の国土とその継承
—「古事記」の構造
に關連して—

「古事記」下巻の構成につ
いての問題—雄略物語
の想定とその意味—

崇神天皇像について
—「記・紀」構成を中心
として—

古事記における伊勢神宮
—天孫降臨条の解釈に關
する一試論—

記紀をどう読むか
—日本上代史の素描—

本位田 菊士

平野 邦雄

中村 明藏

久木 幸男

上山 春平

青木 周平

上田 正昭

都倉 義孝

尾崎 知光

松倉 文比古

高橋 美由紀

宮崎 市定

ヒストリア八九

東洋文化 六〇

『日本古代の国
家と宗教』下

史正 一〇

文学 四八—四

国学院大学日本
文化研究所紀要
四六

文学 四八—四

早稲田商学
二八六

古事記年報二二

竜谷大学仏教文
化研究所紀要
一九

古事記年報二二

思想 六六九

II 雑誌・紀要論文目録

総 雑

日本思想史の問題

恥の文化論—一—

陰陽五行による日本民俗の
構造的把握

前田 一良

佐藤 徹郎

吉野 裕子

寧楽史苑 二五

人文科学研究 五七

民俗学研究 四五—二

古 代

奈良朝における国家理念

横田 健一

『日本古代の国
家と宗教』上

「古事記」の「古」について 「今」の考察	梅沢伊勢三	古事記年報二二
「古事記の時代」ということ と「国学的思考からの脱皮 のため」	梅沢伊勢三	文学 四八―五
安曇磯良の原像 ―岩礁信仰を中心に―	鈴木鹿千代乃	国学院雑誌 八一―一一
貧窮問答歌―憶良に於ける 「貧窮」の意味	辰巳正明	日本文学研究 一九
万葉集における「出雲系神 話」の神々について ―家持の歌を中心に―	加藤静雄	論叢（同朋大） 四三
密教占星法と源氏物語 ―「源氏物語」の見失な われた構造―上―	大久保健治	文芸一九―一一
「源氏物語」における罪	西田禎元	東洋学術研究 一九―二
中古物語文芸における宿世 思想の展開―「宿世の文脈」 を手がかりとして―	佐藤勢紀子	日本思想史研究 一二
道綱母の年始観をめぐる一 考察―時間意識解明の手が かりとして―	佐藤勢紀子	文芸研究（日本 文芸研究会） 九四
発心の風土 ―今昔物語集の人間像―	水林澄雄	明治学院大学一 般教育部付属研 究所紀要 四
文章経国思想から詩言志へ ―勅撰三集と菅原道真―	藤原克己	国語と国文学 五七―一一
日本靈異記の悪報譚 ―日本古代社会における 律の実効性をめぐって―	梅村恵子	東洋文化 六〇

「日本靈異記」の夢	中村生雄	宗教学研究 五四―一
『日本靈異記』と悔過	魚尾孝久	総合仏教研究所 年報（大正大） 二
景戒の回心と『日本靈異記』	中村生雄	文学 四八―一
『日本靈異記』編纂と景戒 ―その体制的側面を中心 として―	伊藤孝子	研究論集（大正 大・院） 四
和光同塵―梁塵秘抄と本地 垂迹思想―	関口静雄	日本歌謡研究 一七
御霊信仰を理解するために 八幡御神影の成立について	高取正男	史窗 三八
陰陽師考	森ちづ子	仏教芸術一二八
九世紀段階の怪異変質にみ る陰陽道成立の一側面	山下克明	古代文化史論攷 一
院政期における方違	小坂真二	『古代天皇制と 社会構造』
藤原伊周呪詛事件について ―宿曜師利原を中心にして―	岡本充弘	史学論叢（東大 ・古代史研）九
清盛の悪行にかかわる夢想 譚	藤本孝一	風俗 一九―一
中臣・忌部の抗争と『古語 拾遺』	原水民樹	学芸紀要（人文 科学）（徳島大） 三〇
『革曆類』についての考察 ―治安元年辛酉を中心と して―	樋口雅宏	民衆史研究会会 報 一五
	佐藤均	『古代天皇制と 社会構造』

最澄の時代観と『顕戒論』

朝枝善照

仏教史研究一二

最澄「法華秀句」中巻について

田村晃祐

東洋学論叢 五

往生伝とその影響

小池長之

東京学芸大学紀要 第二部門 人文科学 三一

大陸渡来の往生伝と慶滋保胤

平林盛待

『日本文化史研究』

鎮源の『法華験記』での法華的世界の形成

大畑正一

『日本文化史研究』

浄土教と播磨(一)(二)
―教信・性空・空也・保胤をめぐって―

田中久夫

月刊百科二二七 二二八

「照千一隅」説再論
―野口恒樹教授の反論に答える―

藺田香融

古代史の研究二

三河入道寂照とその入宋をめぐって

久保木哲矢

国語と国文学 五七―一一

慈円の末法観と聖徳太子讚歌

間中富士子

鶴見大学紀要 第一部 国語国文学編 一七

初期太子観の形態について
―「法皇」「法王」に関する田村圓澄説の検討―

兼子恵順

仏教史研究一四

古代日本における阿育王伝説の展開

追塩千尋

日本歴史三八二

絵巻物に見る日本仏教―餓飢草紙を中心にして―

宮次男

東洋学術研究 一九―一

大化改新と神祇

熊谷保孝

政治経済史学 一七一

天武・持統朝における神祇 (上)・(下)

熊谷保孝

政治経済史学 一七二・一七三

天皇制と祭祀
△特集▽「天皇制と祭祀」にあたって

歴史評論編集委員会

歴史評論三六六

宮廷祭祀の再検討

岡田精司

〃

古代天皇の祭祀―大嘗祭の成立と神話

前川明久

〃

大嘗祭の基礎構造―天皇の祭祀と官人機構―

黒崎輝人

日本思想史学 一二

「大嘗祭」「新嘗祭」の呼称について

加藤優

『日本古代史研究』

大殿祭と忌部氏

岡田莊司

神道宗教一〇〇

「祝詞」に見える神祇職

西宮秀紀

人文論叢 八

神階昇叙の背景

上田正昭

『日本古代の国家と宗教』上

古代天皇の祭祀権と仏教

二葉憲香

〃

書紀祭祀関係記事の検討
―律令祭祀成立への一視点―

茂木貞純

神道宗教一〇〇

律令国家の氏寺政策―寺社併合令をめぐる問題

佐久間竜

『仏教の歴史と文化』

僧尼令的秩序の境界―道慈・玄昉・行基の場合

中川修

〃

九世紀国分寺についての一考察

追塩千尋

『日本古代史論考』

仏名会に関する諸問題―十世紀末頃までの動向―
八世紀日本における「妖言」の法制について

竹居明男

人文学 一三五

八世紀日本における「妖言」の法制について

菊池克美

東洋文化 六〇

別所の展開と聖の宗教活動 —法隆寺西別所金光院 —「聖」律師を中心として	小島 恵 昭	紀要△同朋学園 ・仏教文化研二	神祇史二題—神祇観念と神 社・事代主神の創祀につ いて	川 副 武 胤	古事記年報二二
定恵の渡唐について —飛鳥・白鳳期仏教の性 格に関する一試論	直 木 孝次郎	東洋学術研究 一九一二	風土記における社と神観念 について	白 山 俊 介	湘南史学 五
「続日本紀」天平勝宝八年 十二月三十日条小考	八重樫 直比古	ノートルダム清 心女子大学紀要 文化学編四—一	三輪山をめぐる信仰の重層 性について—所謂△王朝交 替論△にふれて	久 保 泉	学術研究報告 (人文科学)二八 (高知大)
藤原氏と天台宗(下)	伊野部 重一郎	史聚 一二	祓と律令制	利 光 三津夫	法学研究 五三—八
道教と仏教の対論—古代を 中心として	下 出 積 與	『仏教思想史』 二	律令国家の犯罪観と赦の運 用について	佐 竹 昭	史学研究 五十 周年記念論叢
宇佐八幡と道教	田 村 圓 澄	『日本古代の国 家と宗教』上	日本古代における赦の特質 とその背景—赦の契機・論 理の面を中心に	佐 竹 昭	日本歴史三九一
律令国家による儒教的家族 道徳規範の導入—孝子・順 孫・義夫・節婦の表旌につ いて	武 田 佐知子	『古代天皇制と 社会構造』	律令時代の恩赦 —その種類と内容	島 善 高	国学院雑誌 八一—九
日本国家の成立と仏教の関 係	石 川 すみ江	シルクロード10 △創価大V	日本古代における葬礼とそ の意識 —殯についての一考察	岩 田 多佳子	専修史学 一二
古代日本における神と仏の 関係	山 折 哲 雄	東北大学文学部 研究年報 二九	桓武天皇誅の訓読及び語註 と私見	三 間 重 敏	神道史研究 二八—一
上代の精神	栗 原 薫	北海道教育大学 紀要第一部B社 会科学編 三〇—二	古代史の展開と帰化人史観 平安中末期における音楽文 化の展開	李 進 熙	駿台史学 五〇
時間の比較社会学—2—古 代日本の時間意識	真 木 悠 介	思想 六七七	伊藤清司著『日本神話と中 国神話』	横 山 広 子	『日本古代史論 考』
祥瑞の主体としての天 —白雉改元における天観 念の受容	松 島 隆 裕	倫理思想研究五	西宮一民著『古事記』	小野田 光 雄	民族学研究 四五—一
			小野寛著『大伴家持研究』	森 朝 男	皇学館論叢 一三一—一 日本文学 二九—一二

朝枝善照著『平安初期仏教史研究』

平野修一

仏教史研究一四

孤影の創造―西行(一)

吉沢慶一

明治学院論叢(総合科学研究)三〇八

中世

説話文学と仏教

大隅和雄

東洋学術研究一九一二

道心者の抒情―西行の発想の側面

伊藤博之

成城国文学論集一二二

仏物・僧物・人物

笠松宏至

思想 六七〇

栄西―上・下(遺稿)

守本順一郎

季刊科学思想三七、三八

「愚管抄」における聞き書

大隅和雄

日本文学 二九一六

春日浄土と春日曼荼羅

川村知行

美術史研究一七

神道五部書の述作年代

西田長男

神道及び神道史 三五

鎌倉新仏教の成立基盤―特に法照の念仏的性格について

筑紫文顕

仏教史研究一三

中世における神話と歴史―慈円の事績をめぐって

桜井好朗

『仏教の歴史と文化』

熊谷直実の救済の論理と法然教―伝承のはざまにて

杉井輝昭

史学研究 五十年記念論叢

鎌倉政権成立過程における源頼朝の政治行動と宗教意識―治承永平乱期の「鎌倉殿」と「諸寺社」との関係

伊藤南子

政治経済史学 一七四

源空の思想と教団

吉田清

『仏教の歴史と文化』

神判としての起請をめぐって

可児光生

年報中世史研究 五

中世仏教における法然の宗教の位置―国家と宗教との関係を中心として

佐藤弘夫

研究報告(東北大・日本文化研) 一六

鎌倉期僧侶の「学問」観

佐々木馨

人文論究(北海道大) 四〇

法然の選択思想と五決定

奈良博順

日本思想史学 一二

鎌倉時代に於ける南都仏教の動向(前編)

堀池春峰

南都仏教 四三・四四

中世勸進聖の系譜―重源を中心として

中尾堯

立正史学 四七

鎌倉仏教における神と仏

森田康之助

神道学 一〇七

解脱上人貞慶と春日信仰

竹居明男

季刊日本思想史 一五

中世日本の僧侶と禁欲主義―一つの世界史的考察の試み

井手恒雄

文芸と思潮 四四

解脱上人貞慶の禅定について―特に唯識観の実修について

富村孝文

琉大史学 一一

貞慶の研究―笠置隠遁について	伊東和彦	『莊園制社会と身分構造』						
新古今集にみられる宗教意識	高木きよ子	宗教研究 五三―四						
「不請阿弥陀仏」再論 ―『方丈記』結章部の解釈	山田昭全	大正大学研究紀要 文学部・仏教学部 六五						
建久九年の明恵上人	田中久夫	金沢文庫研究 二六―一						
鎌倉期における末法思想について―とくに親鸞を中心に	福岡光超	仏教史研究 一三						
権力者と親鸞―「御消息集」第四通を中心として	竹田章子	真宗学 六一						
高僧和讃二首の解釈 ―源空讃二首の歴史的意味について	藤井元了	真宗研究 二四						
自然法爾の系譜―2―	徳永道雄	仏教文化研究所 研究紀要 一〇						
親鸞研究の根本問題 ―三つの提起	古田武彦	理想 五六九						
親鸞の教説をめぐる異端の問題	石田慶和	理想 五六九						
歎異鈔の構成について	重松明久	日本歴史三八四						
中世的異端の歴史的意義 ―異端教学と莊園制的支配イデオロギー	平雅行	史林 六三―三						
親鸞と蓮如 ―「政治」と「宗教」との関係よりみたる	横井徹	名古屋大学法政論集 八六						
「撰集抄」管見―その神明説話をめぐって	高木豊	日本歴史三八五						
「撰集抄」の基調音	〃	『日本文化史研究』						
沙石集の本覚思想と神常陸における無住の師について	三崎義泉	天台学報 二二						
無住晩年の著述活動小考 ―附 無住著述関係略年譜	提禎子	茨城史林 九						
「正法眼蔵」に於ける「釈迦牟尼仏」理解の展開―絶対者把握の指標として	小島孝之	実践女子大学文学部紀要 二二						
道元と如浄―6―「如浄禅師語録」到来を中心に	伊東洋一	倫理学年報二九 文経論叢 (弘前大) 一五一―一						
道元の哲学―1―	田原八郎	大谷女子大学紀要 一四―二						
板碑にみる日蓮宗仏教儀礼の展開―題目板碑の造立をめぐって	中尾堯	文学部論叢六七 (立正大)						
鎌倉の日蓮宗 ―日蓮直弟の動向	山田泰弘	三浦古文化二七						
近衛政家の日蓮宗信仰	中尾堯	『日本中世の政治と文化』						
日蓮における世界観 ―その所謂終末論的世界観の構造	笠井正弘	宗教研究 五三―四						
日蓮の外典・外道観について	佐々木馨	秋大史学 二七						

日蓮の描く日本仏教史

佐々木 馨

『仏教の歴史と文化』

長楽寺一翁院豪について
—黄竜派から仏光派へ—

平方 和夫

駒沢史学 二七

『釈日本紀』と大嘗祭
—特に「神代卷」の間答について—

安江 和宣

神道史研究 二八一—三

一遍の人間観と民衆教化について

福沢 行雄

東京学芸大学紀要 第一部門 教育科学 三一

弘安七年夏の京都における一遍

今井 雅晴

『日本文化史研究』

初期時宗教団の一考察
—相模国当麻無量光寺真光と藤沢清浄光寺呑海との争いをめぐって—

井口 牧二

国文学研究七二

為兼歌論と仏教思想

栗田 勇

海 九二—四、六、一一、一二

夢窓—12—16

夢窓国師の浄土教批判

萩須 純道

烏丸光広本「徒然草」にあらわれた無常観の発展構造

桜岡 寛

日本文化研究所紀要 一二

「竹むきが記」の無常観

渡辺 静子

日本文学 二九—一

北畠親房の『古今集註』(中)

金子 妙子

日本文学研究 一九

『神皇正統記』における仏教

我妻 建治

『日本中世の政治と文化』

松尾博士の質疑に答える
—拙著『神皇正統記の基礎的研究』の批判に対して—

平田 俊春

軍事史学 一五—三

今川了俊
—その文化的個性の特徴—

大森 北義

日本文学 二九—一二

「曾我物語」と民間信仰
—降神呪術を中心に—

塚崎 進

芸能 二二—六、七

神仏習合の表現構造
—「神道集」の八ヶ権現の説話をめぐって—

桜井 好朗

思想 六七—七

「伊勢宝基本記」の成立
—度会神道成立の一齣—

岡田 莊司

神道史研究 二八—四

神道五部書成立私考

高橋 美由紀

東北福祉大学紀要 四—二

伊勢神道の形成と度会行忠
—「大元神一秘書」の成立をめぐって—

安蘇谷 正彦

日本思想史学 一二

吉田兼俱における神道思想
形成の立場

藤原 正義

国学院雑誌 八一—九

心敬の漂泊・隠遁について
—寛正百首と「さゝめごと」との成立—

塚崎 進

日本文学 二九—五

白拍子の思想
—幸若舞の伝統—

原田 行造

説話文学研究 一五

一条兼良
—その古典学を支えた読書内容の解明—

板野 哲

紀要(新居浜工専) 一六

一条兼良と「日本書記纂疏」

板野 哲

日本文学 二九—一二

説経「小栗判官」論―上―

肥留川 嘉子

芸能史研究 六九

童子教の成立と注好選集

―古教訓から説話集への

一パターン

今野 達

説話文学研究 一五

大友宗麟とキリスト教的理想

渡辺 澄夫

史学論叢 一一

安土宗論について

半田 実

年報中世史研究 五

高取正男著『神道の成立』

中牧 弘允

民族学研究 四四―四

村井康彦・守屋毅編『中世―心と形』

関口 忠男

日本文学 二九―九

渡部正一著『日本古代中世の思想と文化』

広神 清

倫理思想研究 五

近 世

那波活所の思想

柴田 純

日本史研究 二二〇

近世前期における天の思想

―中江藤樹、貝原

益軒の所説を中心に―

佐久間 正

長崎大学教養部紀要・人文科学 二〇(二二)

近世前期儒学思想における

平田 厚志

竜谷大学仏教文化研究所紀要 一九

熊沢蕃山の史観と史論

宮崎 道生

国史学 一一〇・一一一

山崎闇斎より若林強斎へ

近藤 啓吾

神道古典研究会報 二

『神代卷記録』の改変

近藤 啓吾

神道史研究 二八―四

山鹿素行における日用の学

立花 均

季刊日本思想史 一五

伊藤仁斎の思想―性を中心

山本 仁

中哲文学会報 五

堺の儒学者・小山朝三につ

泉 澄一

史泉 五四

和韓唱酬における雲藩儒者

佐野 正巳

人文学研究所報 一四

新井白石と津軽史

宮崎 道生

国史研究(弘前大) 七〇

新安手簡にみる白石と澹泊

荒川 久寿男

史料(皇学館大) 二九

荻生徂徠の訓読観

村上 雅孝

紀要(共立女大・文芸) 二六

田中丘隅の思想の歴史的位

高橋 光二

民衆史研究 一九

『論語』の聖典性の喪失

藤本 雅彦

季刊日本思想史 一五

海保青陵の思想像―「遊

平石 直昭

思想 六七七

と「天」を中心にして

海保青陵と『老子』―『老

八木 清治

日本思想史学 一二

子国字解』をめぐって

菊池 勇夫

立教・日本史論集 一

廣瀬淡窓の敬天思想 ―徂徠を手がかりに―	小島康敬	季刊日本思想史 一五	藩校教育の前提 ―薩摩藩の場合―	沖田行司	人文学 一三五
古賀家三代―精里・侗菴・ 茶溪―の時務策―	松下忠	斯文 八三	彰考館における学問吟味に ついて(二)	鈴木映一	茨城史林 九
古賀精里の大坂遊学時代 ―頼春水書簡による―	頼祺一	西南地域史研究 四	鈴木正三の「因果物語」に ついて	藤吉慈海	禅文化研究所紀 要 一二
九州の文人と大阪―南冥・ 旭莊・言道と緒方洪庵―	宮本又次	西南地域史研究 四	不受不施派農民と池田光政	しらが康義	民衆史研究一九
頼山陽の歴史思想	玉懸博之	日本思想史研究 一二	江戸仏教の特質――盤珪 禅の意義―	高神信也	智山学報 二九
頼山陽史学の動機と高山彦 九郎の自叙	千々和實	神道学 一〇四	神道をめぐる近世儒仏の対 論―慈雲の神道思想を介し て―	柏原祐泉	『仏教思想史』 二
「続日本王代一覽」の研究	藤原暹	アルテス・リベ ラレス 岩手大 学教養部報告 二七	葉隠武士道と曹洞禅―	成河峰雄	宗学研究(駒沢 大学曹洞宗学 研究所) 二二
岸大路洗斎の学問と業績 ―上―	吉崎久	神道史研究 二八(一)	了祥「非人教化」について ―部落差別と真宗教化―	近藤祐昭	紀要(同朋学園 ・仏教文化研) 二
池田草菴―その人と思想の 発展―四―	疋田啓佑	研究報告(都城 工専) 一四	邪教をみる眼―幕末仏教界 における破邪論の形成と ―闢邪護法策―	山本幸規	季刊日本思想史 一五
亀井南冥の学校論と福岡藩 学の設立	辻本雅史	研究紀要(光華 女大) 一八	越前松平家の神祭への転換 について(中・下)	伴五十嗣郎	神道史研究 二八―三、四
日本教師論―二―教育者松 陰とその師道論	小野禎一	東北福祉大学紀 要 四(二)	神田明神の創祀と平将門公 奉斎の問題	沼部春友	国学院雑誌 八一―一一
近世武家の女子道徳につい て	松本瑛子	高知市民図書館 報・別冊(平尾 道雄追悼記念論 文集)	百姓・宗教・戦国大名 ―中世から近世への移行 をどうみるか―	新行紀一	歴史評論三五六
最近の「郷学(校)」の評 価について―津田秀夫氏の 所説を中心に―	籠谷次郎	日本史研究 二二五	改宗―元禄・享保期の民衆 の宗教意識―	川崎文昭	『日本文化史研 究』

近世皮多の抵抗意識―皮多
 百姓意識の形成と伝播―
 一揆伝承と民衆意識の展開
 ―中山道明和伝馬騒動を
 対象にして―
 近世中期―幕末維新期の農
 民層の政治・社会・経済認
 識―三―
 ―羽州村山郡谷地の場合
 前近代の民衆像
 富士信仰の展開
 天理教研究史試論
 ―発生過程について―
 民間宗教者と講集団(一)
 ―木食觀正の東下をめぐ
 って―
 近世の熊野詣

のび しょうじ
 地方史研究
 三〇(一)
 鯨井 千佐登
 歴史(東北史学
 会) 五五
 大藤 修
 史料館研究紀要
 一二
 安丸 良夫
 歴史評論三六三
 宮田 登
 『日本文化史研
 究』
 島 蘭 進
 日本宗教史研究
 年報 三
 西海 賢二
 日本宗教史研究
 年報 三
 新城 常三
 日本常民文化紀
 要 六
 村井 早苗
 史苑 四〇―二
 外山 幹夫
 日本歴史三八七
 小山 應子
 キリシタン研究
 二〇
 上原 袈裟美
 四国学院大学論
 集 四六
 小林 慧子
 論究日本文学
 四三

近世民衆文化の創造
 ―江戸話芸史より観たる
 『武家義理物語』にあらわ
 れた西鶴の町人思考
 ―我物ゆへに裸川(一
 の一)と「約束は雪の
 朝食」(三ノ二)を通
 して
 西鶴に於ける「沙汰」の意
 味
 禁忌の世界―「説教」から
 「近松」へ
 江戸時代の「心中」に關す
 る再認識
 仏頂の禅法と芭蕉の禅法
 芭蕉の「わび」と去来の「さ
 び」
 中興期の俳論
 中井甕庵と犬甘政孝
 ―『犬甘文書』からみた
 二人の親交
 「国歌八論」論争考―その
 断歌論をめぐって―
 馬場文耕とその著作につい
 て
 「田舎荘子」とその思想

比留間 尚
 『日本文化史研
 究』
 田中 邦夫
 大阪経大論集
 一三四
 寺坂 邦雄
 近畿大学第二
 工学部(九州)
 教養論集三(二)
 岩崎 武夫
 日本文学誌要
 二三
 上保 国良
 日本大学文理学
 部研究年報二八
 鑑本 光信
 印度学仏教学研
 究 二九(一)
 浪本 沢一
 俳句 二九
 山下一海
 俳句 二九
 庄 洋二
 信濃 三二―八
 渡部 治
 倫理思想研究五
 今田 洋三
 『日本文化史研
 究』
 藤原 暹
 ノートルダム清
 心女子大学紀要
 国語・国文学編
 四(一)

上田秋成の文芸観

金田文雄

日本文芸研究
三二(二)

菅江真澄と民俗芸能

浅野建二

文学四八(二)

植松茂岳覚書

植松茂

国語と国文学
五七(六)

序説国学思想史研究の課題
—歴史的に形成された問題意識を中心に—

桂島宣弘

日本史論叢 八

国学と仏教の関係について

田原嗣郎

『仏教思想史』
二

学問の成立—契沖「勢語臆断」の場合

野崎守英

国文学 解釈と鑑賞 四五—九

荷田春満の神学—二・三—

上田賢治

国学院雑誌
八一—一、二

真淵の論争—文学の抑圧

村井紀

国文学 解釈と鑑賞四五(四)

真淵と宣長の対象と方法—和歌

萱沼紀子

〃

思想史上の真淵と宣長

野崎守英

〃

村田春海の歴史的位
—文人社会の基盤と関連
させて

芳賀登

歴史人類 九

初期宣長論
—「自然ノ神道」の成立

東より子

歴史学研究
四七九

本居宣長における歌の様相

山田隆信

日本思想史学
一二

尊王攘夷思想の原型
—本居宣長の場合

尾藤正英

季刊日本思想史
一三

宣長における「神」と注釈学

子安宣邦

日本大学精神文化研究所
日本大学研究紀要 一一

古事紀伝について

多田道夫

紀要(和歌山教育)
二九

「本居宣長」補記
—一・二・三・四完

小林秀雄

新潮七七—二、三、五、六

本居宣長のこころの構造

相良享

日本大学精神文化研究所
日本大学研究紀要 一一

老荘の自然と本居宣長の神道

森三樹三郎

理想 五六二

益方末寿の両宮観

中西正幸

神道学 一〇四

伊達千広の「大勢三転考」
—その思想史的考察

荒川久寿男

皇学館論叢
一三一—六

篤胤における国家と「青人草」

平野豊雄

一橋論叢
八四(一)

平田篤胤の仏教批判
—とくに神敵二宗批判を
中心にすえて

芳賀登

『日本文化史研究』

沼田順義—その少青年期

小笠原春夫

日本思想史学
一二

生田万の青年時代—「大代経」と「抱一先生伝」を
中心として

荒川久寿男

皇学館大学紀要
一八

国学者の尊攘思想—大攘夷
への道を中心にして

芳賀登

季刊日本思想史
一三

杉田玄白をめぐる人々

松崎欣一

史学五〇(一、四)
(記念号)

司馬江漢と西歐近代	高橋 憲夫	立正大学文学部 論叢 六八	水戸藩尊攘派の思想と行動 ―激・鎮両派の対立をめぐって	鈴木 瑛一	季刊日本思想史 一三
渡辺崋山のキリスト教理解	鳥井 裕美子	季刊日本思想史 一五	後期水戸学の論理―幕府の 「相対化」と徳川齊昭	吉田 昌彦	季刊日本思想史 一三
徳川時代の遊民論 ―一、―二完―	守本 順一郎	名古屋大学法政 論集 八四―八	幕末の天皇観	山口 宗之	季刊日本思想史 一三
商人的「家」イデオロギ の形成と構造―榎本弥左衛 門「覚書」を中心に	奈倉 哲三	日本史研究 二〇九	幕末期(大島・勝・山田ら) 合作「征韓論」の形成	毛利 豊	駒沢史学 二七
江戸時代の商人観思想	藤井 定義	経済研究 二五(二)	佐幕派維新観覚書	田中 彰	『日本社会史研 究』
佐藤信淵経済学の一考察	布施 啓一	立命館文学 四一五―七	維新の変革と幕臣の系譜 ―改革派勢力を中心に― 国家形成と忠誠の転移相克 ―四	菊地 久	北大法学論集 三一(二)
石門心学における実践倫理 の転回―梅岩から堵庵へ	逆井 孝仁	立教経済学研究 三四―三	明治維新の思想的前提とそ の諸相	佐々野 昭弘	八代学院大学紀 要 一九
日本政治思想における動態 的世界観の成立	高橋 康昌	法学新報 八七―三・四	ラザフォード・オールコッ ク覚書―二―幕末期の日本 観―一―	増田 毅	神戸法学雑誌 二九(三)
大原幽学の思想(一) ―若干の前提	木村 礎	『近世国家の展 開』	幕末期における豪農の意識 と行動―羽州村山郡幕領の 陣屋統合問題と伊藤義左 衛門	吉田 えり子	お茶の水史学 二三
大原幽学の思想 ―体系と核心	木村 礎	『日本文化史研 究』	武蔵の豪農と尊攘思想―大 里郡甲山村根岸友山の場合	沼田 哲	季刊日本思想史 一三
横井小楠における政権構想 の展開―公武合体論から公 議政体論へ	高木 不二	史学 四九―四	幕末農民の経済思想	庄司 吉之助	福大史学 三〇
横井小楠の社会経済思想 ―「国是三論」―富国論― の学問的基礎	山崎 益吉	高崎経済大学論 集 二三(二)	源了圓著『近世初期実学思 想の研究』	玉懸 博之	文芸研究 九五
吉田松陰の革命思想	岡崎 正道	日本思想史研究 一二	源了圓著『近世初期実学思 想の研究』	宮城 公子	史林六三(六)

圭室文雄・大桑齊共編『近世仏教の諸問題』

新城敏男

日本仏教 五〇・五一

古田紹欽・今井淳編『石田梅岩の思想』

子安宣邦

国学院雑誌 八一―四

本居宣長研究の一側面―野崎守英『道―近世日本の思想』を中心に

横地信芳

北大史学 二〇

芳賀登著『幕末国学の研究』

沼田哲

史学雑誌 八九(一二)

庄司吉之助著『近世民衆思想の研究』

桂島安喜弘

日本史研究 二二三

日本民衆思想史研究に関する海外の動向―C、C、L、U、C、K氏の論文を中心に

布川清司

神戸大学教育学部研究集録六四

近代

「日本思想」Das Japan-Geist研究ノート―一―五

住谷一彦

世界 四一―四、四一―五、四一―八

近代天皇制の形成過程―四

下山三郎

東京経大会誌 一一五

近代日本と「市民社会」についての断想

金原左門

法学新報 八七―三・四

近代日本人の倫理観―一―

堀内操

高千穂論叢 五五―二

近代日本のキリスト教と朝鮮

石丸新

論叢(四国学院大) 四五

明治以降の親鸞像の再検討―森三樹三郎氏の自然法爾解釈への批判を媒介として

木全徳雄

筑波大学哲学・思想学系論集六

近代仏教と社会事業従事者養成

菊池正治

『仏教の歴史と文化』

日本近代思想家の天台観―一―包弁証法における三諦論の位置

星宮智光

天台学報 二二

近代日本の教育における宗教の意義に関する覚え書―戦前を中心

鈴木美南子

フェリス女学院大学紀要 一五

日本の近代化と宗教―「信教の自由」の問題を中心として

出口栄二

社会科学討究 二五―三

明治政府の宗教政策―信教自由論検討の前提として

藤原正信

仏教史研究 一二

近代における天皇即位儀礼―睦仁・嘉仁の場合

西秀成

歴史評論 三六六

近代天皇制について―鎌倉孝夫氏の批判に答える

後藤靖

立命館経済学 二八

近代日本における立憲思想と政党の生成―幕末新維新における立憲思想―一―

鈴木教道

現代科学論叢 一四

周縁と新しい人間―金光教祖の場合

荒木美智雄

思想の科学 第六次 一二四

神仏分離と祭事―三峯神社の場合

横山晴夫

国学院雑誌 八一―一一

幕末・明治初期の政党観について―日本における政党像の形成

高橋正則

法学論集(駒沢大学法学会) 二二

同業組合と営業の自由

藤田貞一郎

季刊日本思想史 一四

明治期紡績関係者の経営理念―国益ナシヨナリズムと家族的温情主義

岡本幸雄

季刊日本思想史 一四

住友の経営理念—近代住友の多角化と理念	瀬岡 誠	季刊日本思想史 一四	明治二十、三十年代における福沢諭吉の思想と行動—「時事新報」社説を通しての考察—中—	小久保 義直	政治経済史学 一六七
国事執掌者の映像—武州多摩出身 落合直亮	安藤 良平	跡見学園女子大学紀要 一三	ローレンツ・フォン・シュタインに宛てた福沢諭吉の書簡について	早島 瑛	近代日本研究二
明治前期におけるルソー受容をめぐる二・三の問題	藤野 雅己	政治経済史学 一七〇	明治前期の賢母論	中 慮 邦	『日本文化史研究』
保護司とわがたり—二—原胤昭とその時代—キリスト者胤昭と明治初期の獄政などについて	山崎 喬	犯罪と非行四三	岩倉使節団と信教自由の問題	山崎 渾子	日本歴史三九一
明治啓蒙思想研究序説—二—加藤弘之の哲学と政治思想	米原 謙	阪大法学 一一四	近代日本のナショナリズム—陸羯南の場合	小股 憲明	社会福祉評論 (大阪女子大) 四七
日本の「啓蒙」思想家と宗教—加藤弘之の初期思想における宗教観	金子 洋子	国史学研究 六	陸羯南の外政論—明治三一—三三年—(一)—	山口 一之	駒沢史学 二七
森有礼の宗教観	定平 元四良	関西学院大学社会学部紀要四〇	福本日南の思想形成—明治一〇年代ナショナリズムの一側面	広瀬 玲子	日本史研究 二一四
福沢諭吉における西欧政治思想の摂取とその展開とに關する一考察—普遍的人權の原理を中心に	安西 敏三	法学研究(慶応大学)法学研究(会) 五三—二	明治前期の国体観と井上毅	大原 康男	国学院雑誌 八一—五
福沢諭吉の窮理認識	梅原 利夫	教育 三〇—二	井上毅と明治十四年政変	中島 昭三	法学新報 八七—三・四
福沢諭吉の科学観について	川口 俊郎	九州産業大学教養部紀要 一六—一・二	伊藤博文と井上毅の政党観—中—	高橋 正則	政治学論集一一
「時事新報」論説における朝鮮問題—一—壬午軍乱前後	青木 功一	新聞研究所年報 一四	壬午事変後における元田永孚の朝鮮政策案—「朝鮮処分私案」『聖諭大言』他	沼田 哲	青山史学 六
			北村透谷とカーライル	吉田 芳江	日本文学 二九—一〇

坂本南海男の政治思想
—立志社の指導理念とキリスト教民権説

吉田 曠 二

高知市民図書館
報・別冊(平尾道雄追悼記念論文集)

「万国公法」認識から東洋盟主論まで—小野梓の対外論とその展開—下—

細野 浩 二

早稲田大学史紀要 一—三

小野梓の政治思想の基礎的形成と発展—共存同衆とその政治思想—三—

沢 大 洋

東海大学紀要政治経済学部 二—二

原始蓄積過程における仏教の貧困者認識

吉田 久 一

社会事業の諸問題 二—六

渋沢栄一—の思想形成—特に初期の国家意識の形成について

小野 健 知

日本大学理工学部一般教育教室彙報 二—七

渋沢栄一における調和思想の展開—特に労働と資本をめぐって

小野 健 知

紀要(日大・精神文化研・教育制度研) 一—一

日清戦後の時代と「貧民論」

橋本 哲 哉

経済論集(金沢大) 一—七

国体論と兵権思想—「軍人勅諭」の国体観を中心として—

大原 康 男

神道学 一—〇四

清沢満之についての覚え書—教団革新論の運動と挫折をめぐって

赤松 徹 真

竜谷史壇 七—八

大西祝論

山田 芳 則

文化史学 三—六

大西祝の文芸思想

金田 民 夫

美学 三—一—二

高山樗牛の日蓮主義

渡辺 宝 陽

日本仏教 五〇—五—一

内村鑑三における科学

徳山 近 子

科学史研究 一—三四

内村鑑三における「書く」の意味—いわゆる不敬事件との関連で

亀井 秀 雄

文学 四—八—六

内村鑑三の世界観とShakespeareの人間観(中) 一—一〇

前田 利 雄

札幌大学外国語学部紀要 文化と言語 一—三—二

内村鑑三の文明評論—「聖書之研究」を中心にして

小原 信

青山学院大学文学部紀要 二—二

エレミアと内村鑑三

小泉 仰

社会科学討究 二—六—一

内村鑑三と社会批判

山田 洸

文学会志(山口大) 三—一

石川三四郎の「土民生活(デモクラシー)」思想—その生成と構造をめぐって—

竹内 則 之

武蔵大学人文学会雑誌 一—二—一

木下尚江と田中正造—日本近代化の過程における二人の出会いの意味をテーマとして

藤 田 美 実

立正大学文学部論叢 六—七

村落共同体と田中正造

安食 文 雄

竜谷史壇 七—八

明治末期の「憲政」論の展開—憲政擁護と国体護持の論理構造

田 中 和 男

同志社法学 三—二—二

初期社会主義運動家小田頼造の研究(上)

長 江 弘 晃

紀要(日大・精神文化研・教育制度研) 一—一

内田魯庵と大逆事件 —啄木・花・修との関 連において	吉田悦志	文芸研究 明治 大学文学部 紀要 四三	大正期における倫理・宗教 思想の展開—一〇—安倍・ 天野に見られる「大正か ら昭和へ」	峰島旭雄	早稲田商学 二八六
明治二〇年代におけるキ リスト教雑誌「平岩愼保の 『野声反響』について	山本幸規	日本思想史学 一二	滔天と孫文 —「三十三年之夢」まで	齊藤道彦	中央大学論集一
明治後期キリスト教の社会 的性格—二〇世紀大挙伝道 を中心として	工藤英一	明治学院大学キ リスト教研究所 紀要 一三	吉野作造への一視角—1— —3—	野村乙二朗	政治経済史学 一七〇
留岡幸助と報徳思想	守屋茂	キリスト教社会 問題研究 二八	田中王堂とジョン・デュー イ	磯野友彦	日本デューイ学 会紀要 二一
留岡幸助と非行問題	住谷馨	キリスト教社会 問題研究 二八	北一輝と美濃部達吉の国家 思想—天皇機関説事件の思 想史的解明のために	小山常実	季刊日本思想史 一五
留岡幸助の教育思想	井上勝也	キリスト教社会 問題研究 二八	北一輝における進化論の受 容と変容—上—	岡本幸治	人文・社会科学 二八
留岡幸助と慈善問題—近代 日本における社会事業実 践の構造とその倫理	村山幸輝	キリスト教社会 問題研究 二八	大正期自由主義者の対外観 —石橋湛山を例として	上杉允彦	高千穂論叢・昭 和54年度(二)
空知集治監時代の留岡幸助 —感化事業の原点	宝田保夫	キリスト教社会 問題研究 二八	初期上杉慎吉と市村光恵に おける国家と天皇—1—	宮本盛太郎	社会科学論集 (愛知教育大学) 一九
浅草亀岡町における海保熊 次郎—キリスト教と部落問 題への歴史的考察	工藤英一	明治学院大学論 叢 二九〇	西田哲学と日本における近 代意識	田平暢志	季刊科学と思想 三六
文学者の成立—荒畑寒村論	林尚男	日本文学 二九—四	西田哲学における「意識の 野」について	西村恵信	禅文化研究所紀 要 一二
明治文化史上における東京 学士院の活動—特に文教問 題關係を中心として	福地重孝	『日本文化史研 究』	西田哲学における「逆対応」 の問題—その批判的理解の ために—2—	阿部正雄	理想 五六五
大正デモクラシー研究の一 視点 —一九八〇年代における	雨宮昭一	紀要(茨城大・ 教養) 一二	西田哲学とヘーゲル —禅仏教と西洋哲学 —西田幾多郎の場合	峰島旭雄	比較思想研究七
				上田閑照	比較思想研究七

田辺元における弁証法の展開
—2—大正から昭和への思想史

渡辺和靖

愛知教育大学研究報告 二九

和辻倫理学の原理についての覚え書—1—

河邑光夫

名古屋大学文学部研究論集七八

思想対策協議会—日本ファシズム形成期の思想対策

小田部雄次

立教日本史論集一

「前期学生運動」と無産政党—「政治」観の問題を中心に

有馬学

近代日本研究二

日本におけるマルクス主義の成立

守屋典郎

現代と思想三九

吉倉汪聖というアポリア—大陸浪人論序説

松本健一

思想の科学(第六次) 一一八

橋樑—アジア主義の彷徨

野村浩一

立教法学 一九

下中弥三郎の思想—デモクラシーからファシズムへの軌跡

島津節子

歴史評論三六五

久松真一における宗教性について—1—

沼田隆

愛知教育大学研究報告・人文科学 二九

東亜連盟論の成立と展開—一九二八年の儀式と「国民」—即位礼と奉祝行事

桂川光正

史林 六三

昭和一〇年代の葉山嘉樹論

菊池克美

歴史評論三五八

九鬼周造における詩と哲学—思想の形成をめぐる

水上勲

論集(帝塚山大) 三一

九鬼哲学における形而上学的実在の問題

大野圭一郎

思想 六六八

田中正義

思想 六六八

思想 六六八

思想 六六八

思想 六六八

九鬼哲学と偶然性の問題

下店栄一

思想 六六九

折口信夫と「既存者」—天つ罪・国つ罪の周回

高橋広満

国文学研究七二

「15年戦争」下の仏教者—妹尾義郎と暁鳥敏の場合

福島和人

『仏教の歴史と文化』

石原莞爾と総力戦思想

小林英夫

歴史評論三六〇

昭和陸軍の鬼才・石原莞爾について—その生涯・思想と文献の紹介

田中梓

参考書誌研究 一九

「風土」と日本文化論、その覚え書—「生産力理論」に關わって

篠原三郎

法経研究(静岡大学人文学部) 二九

大浜徹也著『明治キリスト教会史の研究』

西山茂

日本仏教 五〇・五一

渡辺和靖著『明治思想史—儒教的伝統と近代認識論』

田代和久

文芸研究 九四

安丸良夫著『出口なお』

鹿野政直

歴史評論三六三

安丸良夫著『神々の明治維新—神仏分離と廃仏毀釈』

中島三千男

日本史研究 二一六

ひろた・まさき著『文明開化と民衆意識』

左右田昌幸

国史学研究 六

坂野潤治著『明治・思想の実像』、酒田正敏著『近代日本における対外運動の研究』

伊藤隆

近代日本研究二

巨勢進著『元田東野』を讀む

鎌田正

国士館大学人文学会紀要 一二

中野孝次著『若き木下尚江』

青木信雄

日本文学 二九

嶋田厚・野田茂徳・田代慶一郎・飯沢耕太郎・宮田登共著『大正感情史』によせ

安田常雄著『日本フアンズムと民衆運動』

補遺

昭和五十四年

江戸期日本の先覚者たち
唯物論思想の夜明け

吉田松陰

西郷隆盛八角川選書

叢書・日本の思想家47
元田東野・副島蒼海

日本における神と仏の交渉

三世紀極東諸民の宗教と祭式―倭人伝宗教習俗の位相

三輪山をめぐる信仰の重層性について―所謂△王朝交替論△にふれて

「古事記」みそぎの条前半に現われる神々について

御霊信仰と天皇制

鴨長明における数寄意識の展開―『今鏡』を接点として

大浜徹也

倫理想研究五

鈴木正幸

史学雑誌
八九一九

ザトロフスキー
日ソ協会翻訳委員編

東研

関根悦郎

創樹社

奈良本辰澄

角川書店

巨勢進

明德出版社

村山修一

仏教思想史一

川副武胤

日本歴史三七八

久田泉

人文科学(高知大学) 二八

井手至

人文研究(大阪市大・文)三一

綱沢満昭

岐阜経済大学論集 一三四

横山一美

二松学舎大学人文論叢 一七

初期真宗における末法観の
変容―存覚を中心として

佐藤弘夫

仏教学 八

世阿弥の芸道論―「花」の
展開を中心として

池田富蔵

日本文学研究
(梅光女学院大
学) 一五

中世における修験の思想
―教義書を中心として

宮家準

中世文学 二四

日本における「経済学」の
萌芽―三浦梅園『原価』の
場合

西村孝夫

歴史研究(大阪
府大) 二〇

自照歌にみる秋成晩年の思
想的境界

鷲山樹心

季刊文学・語学
八五

江戸期における西洋物理学
受容の一断面―帆足万里
「窮理通」にみる

佐藤通

神戸外大論叢
三〇―二

佐久間象山における初期朱
子学思想の形成

栗原孝

桐朋学園大学研
究紀要 五

藩政担当者の国学受容
―片桐春一における国学
の機能

松下新一

駿台史学 四八

西郷隆盛の思想と人格―幕
末における坂本龍馬の人
間像との比較において

鈴木教道

現代科学論集
一三

福沢諭吉と渋沢栄一
の思想について
―特に儒教を巡って

多田顕

千葉大学教養部
研究報告A一二

文明開化と科学教育の思想

川本亨二

教育学雑誌二二

初期民友社派と漢学―北村
透谷の様相と対比しつつ

榎林滉二

研究論文集(佐
賀大)二七―II

伊藤博文と井上毅の政党観
―上―

高橋正則

政治学論集一〇

明治中期の女子教育について ——とくに井上毅を中心として	兼重宗和	徳山大学論叢 一三
矢野龍溪の「新社会」——明治近代化過程におけるユートピア思想の意義	宮井敏	人文科学 一〇
幸徳秋水の政治思想——中江兆民との関連を中心に	出原政雄	同志社法学 三一—一
河上肇における科学と宗教と哲学	古田光	経済論叢（京大 経済学会） 一四—一五・六
大正期における倫理・宗教思想の展開——八——初期田辺哲学の形成	峰島旭雄	早稲田商学 二八一
古代史像「改造」論——帝国主義期の国体論批判	福嶋寛隆	竜谷大学仏教文化研究所紀要 一八
昭和維新の精神的背景——血盟団事件の場合	吉田博司	紀要（武蔵野女子大） 一四

発刊の辞

東北大学法文学部の開設とともに、故村岡典嗣氏を初代の主任教授として日本思想史学専攻が設立せられたのは大正十二年のことである。

昭和二十一年春、村岡氏が定年退官せられて後、後任者の得難きままに九年余を経て、昭和三十年に故竹岡勝也氏が就任せられた。しかし竹岡氏も在職二年にして定年退官せられ、一年を経て昭和三十三年に私が同教授の芳燭をけがすことになった。

本専攻の学部（第三・四年）は「日本思想史学専攻」として文学部史学科に属し、大学院（修士・博士課程）は「国文学国語学日本思想史学専攻」として文学研究科に属している。日本思想史学の独立の講座を基礎として、日本史（国史）専攻、乃至は国文学専攻または倫理学専攻とは別に、独立した「日本思想史学専攻」が設けられているのは、東北大学のみである。

以上の如き本専攻の歴史と現状に鑑み、関係者相い諮って、専攻専属の機関誌として、本誌を刊行し、その研究・教育の状況を学内外に紹介することにした。大方の御援助を仰ぐ次第である。

昭和四十二年三月

石田一良

日本思想史研究 第十五号

昭和五十八年三月十五日 印刷
昭和五十八年三月二十五日 発行

編集代表者 玉 懸 博 之

仙台市日の出町二丁目四ノ二

印刷所 (株) 仙台共同印刷

仙台市川内

発行所 東北大学文学部

日本思想史学研究室

